

## 長明の焼身

拾遺往生伝・元亨釈書・東国高僧伝・天台霞標・本朝法華伝・絵入本朝法華伝

「信濃史料」卷二の康保三の項に「釈長明、信濃戸隠山に於て火定す」とあつて、「元亨釈書」「天台霞標」「拾遺往生伝」「東国高僧伝」の所伝を載せている。「元亨釈書」「天台霞標」「東国高僧伝」はほぼ同内容で、「拾遺往生伝」とはかなり異なる、というより、「拾遺往生伝」は三書より内容がより詳しい。最大の相違点は三書が「康保三」とするのに対して「拾遺往生伝」が永保三とすることである。すでに牛山佳幸が「戸隠顕光寺年表」〔古代・中世〕（信州大学教育学部紀要98）で「元亨釈書」「天台霞標」は誤りで永保年中とすべきではないか、と指摘している。「天台霞標」と「東国高僧伝」は「元亨釈書」に依っているとされるから、問題とすべきは「拾遺往生伝」と「元亨釈書」の異なりであろう。

いま、三書をあげてみる。

元亨釈書（十二忍行五） 虎関師鍊著 元亨二（1322年）  
釋長明。居<sub>ニ</sub>信州戸隠山<sub>一</sub>。年二十五。絶<sub>ニ</sub>言語<sub>一</sub>誦<sub>ニ</sub>法華<sub>一</sub>。  
亦三歳不<sub>ニ</sub>偃臥<sub>一</sub>。一日語<sub>レ</sub>人曰。我是一切衆生喜見菩薩也。  
來<sub>ニ</sub>此所<sub>一</sub>焼<sub>レ</sub>身已三回。今命盡上<sub>ニ</sub>兜率<sub>一</sub>。便積<sub>レ</sub>薪。入<sub>レ</sub>内自  
焚。康保年中也。

〔国立国会図書館デジタルコレクション〕の「国史大  
系・第14巻 百鍊抄 愚管抄 元亨釈書」（DOI  
10.11501/991104）431,432コマ目。）

東国高僧伝（六） 高泉性著 貞享五（1688年）

戸隠山長明傳<sub>文豪</sub>

釋長明。不<sub>レ</sub>詳<sub>ニ</sub>其姓氏<sub>一</sub>。年二十五。居<sub>ニ</sub>信州戸隠山<sub>一</sub>。禁<sub>レ</sub>  
語誦<sub>ニ</sub>法華<sub>一</sub>。脇不<sub>レ</sub>沾<sub>レ</sub>席者二年。一日語<sub>ニ</sub>門人<sub>一</sub>云。我是一  
切衆生喜見菩薩。來<sub>レ</sub>此焚<sub>レ</sub>身已三度耳。今命盡上<sub>ニ</sub>生兜率<sub>一</sub>。  
遂積<sub>レ</sub>薪入<sub>レ</sub>内自焚。時康保年中也。

（日本仏教全書 104より。68頁）

天台霞標（七之二） 明和八（1771年）に金竜敬雄が刊。

羅溪慈本が文政十二（1829年）と文久一（1862年）に  
校訂・増補。

○戸隠長明法師

喜見菩薩釋書十二

長明居<sub>二</sub>信州戸隠山<sub>一</sub>。年二十五絶<sub>二</sub>言語<sub>一</sub>誦<sub>二</sub>法華<sub>一</sub>。亦三歳  
不<sub>二</sub>偃臥<sub>一</sub>。一日語<sub>レ</sub>人曰。我是一切衆生喜見菩薩也。來<sub>二</sub>此  
所<sub>一</sub>燒<sub>レ</sub>身。已三回今命盡上<sub>二</sub>兜率<sub>一</sub>。便積<sub>レ</sub>薪入<sub>レ</sub>内自焚。康  
保年中也

国立国会図書館デジタルコレクションで「大日本仏教全  
書」を検索。その内の「大日本仏教全書・126」（DOI  
10.11501/952830）が「<sub>一</sub> 天台霞標第二<sub>一</sub>」で、その153  
コマから156コマが該当箇所。なお、この「大日本仏教  
全書」は1922年の「仏書刊行会」のもの。

こうしてみれば多少の語句の異なりはあっても同一系  
列であって、別に原本があってそれぞれがそれを採録し  
たとも、事実を伝える三系列の文書があったとも思えな

い。「天台霞標」は「釈書」からと断つてもいる。

これに対して『拾遺往生伝』は次のようになっている。

拾遺往生伝 三善為康著 1132 年頃成立か。(鎌倉時代の写

しである宝生院(真福寺)蔵本に基づく「日本思想大系

7」所収の『拾遺往生伝』(翻刻・大曾根章介)より。)

持経者長明者。信濃国戸隠山之住僧也。生年廿五。断言語而三年。誦法花而幾日。毎日百部。未曾偃臥。邂逅客語曰。吾是喜見菩薩之後身。來生此処。烧身三遍。今生之終焉。期三月十五日。然而兜率天上。来会有限。二月十八日。遂以烧身。于時永保年中也。

今案。兜率上人不載西土之記。而已謂喜見之後身。豈非随意滅度乎。故以記之。

「元亨釈書」は「拾遺往生伝」を削ぎ落としたものであつて、牛山に倣つてもっとも古い文献である「拾遺往生伝」の永保を重んずべきであろう。

「信濃史料」の「拾遺往生伝」が何を底本としている

かはいま審らかではないが、「浄土宗全書・続6」そのもの、もしくは同一の底本を用いていると思われ、「浄土宗全書・続6」でも「永保」とあるが、「信濃史料」は「永」に（康カ）と付してして書き下し文では「康保」としている。「康」を採用した根拠はわからない。

先に、「拾遺往生伝」を「元亨釈書」が内容を削ぎ落としているといたが、焼身の予定日を三月十五日から二月十八日に変更した部分と、その理由に関わると思われる「来会有限」の部分の削除で、難解な部分を削っている。

また、「日本思想大系7」の「拾遺往生伝」と、「信濃史料」及び「浄土宗全書・続6」の「拾遺往生伝」の間では次の相違がある。

「然而兜率天上。来会有限。」 「日本思想大系7」

「然而兜率天上來、食会有限、」 「信濃史料」

「然而兜率天上來。食会有<sub>レ</sub>限。」 「浄土宗全書・続6」

「豈非随意滅度乎。」

「日本思想大系7」

「豈悲随意滅度乎、」

「信濃史料」

「豈悲随意滅度乎。」

「浄土宗全書続6」

註 「浄土宗全書続6」は「国立国会図書館デジタル

ルコレクション」に画像があり、該当箇所は、

44コマ目。DOI 10.11501/1140469

なお、長明の伝承は後世もよく取り上げられる。次に「本朝法華伝」と「絵入本朝法華伝」をあげておく。

### 本朝法華伝

万治三（一六六〇年）。元政。俗姓、石井氏。諱（いみな）は日政。

平樂寺村上勘平衛（京都）寛文1（1661）。

大洲市立図書館 矢野玄道文庫所蔵。

なお、長明の焼身については『拾遺往生伝』を参照。

戸隠山長明

釋長明。居<sup>リ</sup>ニ信州戸隠山<sup>トカクシ</sup>ニ。年二十五<sup>ニシテ</sup>。絶<sup>テ</sup>ニ言語<sup>ヲ</sup>一誦<sup>ス</sup>ニ法華<sup>ヲ</sup>。亦三歳不<sup>ニ</sup>偃臥<sup>セ</sup>。一日語<sup>テ</sup>人<sup>ニ</sup>曰。我ハ是<sup>レ</sup>一切衆生喜見菩薩也。來<sup>テ</sup>ニ此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>燒<sup>ク</sup>コト<sup>ト</sup>身<sup>ヲ</sup>已<sup>ニ</sup>三回。今命盡<sup>テ</sup>上<sup>ル</sup>ニ兜率<sup>ニ</sup>。便<sup>チ</sup>積<sup>ミ</sup>レ薪入<sup>テ</sup>内<sup>ニ</sup>自焚<sup>ク</sup>康保年中也

註 新日本古典籍総合データベース

DOI 10.20730/100227120 37/ 38 ページ

絵入本朝法華伝

享保四（一七一九年）。元政。俗姓、石井氏。諱（いみな）は日政。

名古屋大学附属図書館 一般 188.9/G/文庫外  
73(10179415・10179416)。該当箇所の絵はない。絵入ではない『本朝法華伝』と内容は同じでも文言は異なる。

なお、長明の焼身については『拾遺往生伝』を参照。

とがくしやまちやうめい  
戸隠山長明

こうほうねんちう 康保年中。くに しののゝ国。ちやうめい とがくし山に長明といふ僧有けりそう 廿  
さい 五歳のとしより。むごん ぎやう 無言を行して。ひたすら。ほけきやう じゆ 法華経を誦しけ  
またみとせ あいだ り。又三年の間。ひるよる。ねる事を。せざりけり。ある時  
かた われ これ いっさいしゆじやうきけんぼさち 人に語らく。我は是。一切衆生喜見菩薩也。此所にをみて。  
み 身をやくこと。すでに三たび也。今いまのち尽つきたり。兜率天とそつてんに  
たき のぼるべしとて薪をつみて。みつから焼死給ひけり。やきうせ

註 新日本古典籍総合データベース DOI ..

10.20730/100272466 55 P.4目。